

ロシアのエネルギー資源輸出の動向

—日本、アジア太平洋地域に与える意味—

アジア経済交流センター 貿易・投資アドバイザー 森岡 裕

はじめに

ロシアはエネルギー資源大国であり、エネルギー部門はロシア経済を支える重要な産業である。ハイテク部門や競争力のある製造業の育成を目指しているが、現状ではロシア経済はエネルギー部門（エネルギー資源輸出）に依存している。これまで、ロシアのエネルギー資源輸出の主要な市場はヨーロッパであった。だが成長・発展が著しいアジア・太平洋地域への輸出拡大（東方シフト）を図っている。成長するアジア・太平洋地域、したがってエネルギー需要が継続的に増大する当該地域を有望な市場としてとらえている。アジア・太平洋地域が必要とするエネルギー資源をロシアが供給し、当該地域の成長を持続的なものとするとともに、ロシア東部（東シベリア、ロシア極東）をアジア・太平洋地域と経済的に結合させることによってロシア東部の経済的発展を企図している。

他方、アジア・太平洋地域に属する日本は、ロシアの東方シフト政策の重要な対象国でもある。石油の中東依存が80%をこえる（特にサウジアラビアとUAEの2カ国で約60%）日本にとっても、調

達先の分散・多様化という点でロシアは重要な国となる。

そこで本稿では、日本、アジア・太平洋地域にとってロシアのエネルギー資源輸出の動向が持つ意味を考える。なおここでの視点は経済的なものであり、政治・外交的なものはあつかっていない。

1. ロシアの石炭輸出

脱炭素、温暖化防止という世界的な潮流のなかで、化石燃料、とりわけ環境への負荷が大きい石炭には厳しい逆風が吹いている。再生可能エネルギーの強化が進展していくなかで、石炭も含めて化石燃料の役割が低下していくことは否定できない。だが、21世紀の半ばまでは発電燃料としての石炭の役割は維持されるであろう。アジアには経済発展が著しい新興国が存在し、経済発展に伴って発電需要が増大し続けているが、そこでの発電の中心は石炭火力発電所である。

表-1に示されるように、アジア・太平洋地域の電力の70%近くが石炭火力発電所によってカバーされている。2040年にはシェアを低下させるが、それでも51%は石炭火力によってまかなわれると

表-1. 発電源に占める石炭と再生可能エネルギーの割合 (%)

	2018		2040	
	世界	アジア・太平洋地域	世界	アジア・太平洋地域
石炭	45	68	33	51
水力	7	6	7	6
バイオ	4	4	6	6
その他の再生可能エネルギー	4	4	16	15

出所：World Energy Outlook 2019, IEA, p.678.726. より作成

予測されている。確かに石炭は環境への負荷が大きく、再生可能エネルギーに転換していくことは妥当な方向・政策である。だが現在および21世紀半ばにおいて石炭火力発電を完全に停止させると、アジア・太平洋地域の人々に「電気を使用するのを止めてください」ということになりかねない。これは、現実的な選択肢になりえない。環境への負荷を抑えたいうえで石炭を利用していく（クリーン・コール・テクノロジーの活用等）ことが、現実的な対応と言える。

ロシアの石炭の主要な輸出先（上位10カ国）を見ると（表-2）、アジア・太平洋地域から6カ国が入っている。エネルギー需要がこれからも増大し続けるとともに、発電燃料としての石炭需要が大きい当該地域は、ロシアの石炭部門にとって重要な市場となる。

表-2. ロシアの石炭の主要輸出相手国・地域
(CIS 諸国を除く) 2019年

輸出相手国・地域	輸出量 (1000トン)
中国	26,736
韓国	24,175
ドイツ	21,292
日本	20,035
オランダ	13,766
ポーランド	10,885
トルコ	9,404
台湾	8,533
インド	7,557
ベトナム	5,832
総輸出量	205,394

出所: Внешняя Торговля Стран Содружества Независимых Государств 2019, с. 218. より作成

2. ロシアの石油輸出

ロシアの石油の主要な輸出先はヨーロッパであるが、ESPO（東シベリア・太平洋パイプライン）が稼働して以降、東方市場へもロシアの石油が本格的に輸出され始めた。主要輸出先（上位10カ国）の

なかに、中国、韓国、日本が入っている（表-3）。これら3カ国の輸入量は9200万トンになり、ロシアの総輸出量の1/3に相当する。特に中国は、ロシアの石油部門にとって最大の輸出先となっている（中国にとっても、ロシアが第1位の輸入相手国となっている）。中国への過度な依存はロシアにとっても避けたいところだが、今後とも中国が有力な「顧客」の地位を占めると想定される。

表-3. ロシアの石油の主要輸出相手国・地域
(CIS 諸国を除く) 2019年

輸出相手国・地域	輸出量 (1000トン)
中国	70,640
オランダ	46,172
ドイツ	18,922
韓国	15,303
イタリア	14,611
フィンランド	9,852
トルコ	8,155
日本	6,438
スロバキア	5,025
総輸出量	269,125

出所: 同上

3. ロシアの天然ガス輸出

石油と同様に天然ガスに関してもロシアのパイプラインは西部を中心に整備されており、ロシア東部には天然ガスの幹線パイプラインがまだ整備されていない。したがって、天然ガスの主要な輸出先はヨーロッパとなっている（表-4）。ただ「シベリアの力」パイプライン（ロシア極東から中国東北部へ天然ガスを輸送するパイプライン）の稼働によって、中国向けの天然ガス輸出が増大していくと考えられる。

なおLNGに関しては、日本に94億m³（2018年）が輸出されており、これはイギリス向けと同程度の輸出量となっている。（注釈1）また中国へは13億m³、韓国へは26億m³が輸出されている。（注釈2）

表-4. ロシアの天然ガスの主要輸出相手国・地域
(CIS 諸国を除く) 2019 年

輸出相手国・地域	輸出量 (100 万m ³)
ドイツ	54,680
オーストリア	16,660
トルコ	15,378
イタリア	14,284
フランス	13,795
オランダ	10,201
イギリス	9,876
チェコ	8,292
ハンガリー	7,852
ポーランド	5,754
総輸出量	220,581

出所：同上

まとめ

ロシアのエネルギー資源輸出は、中国を中心に東方シフトが進んでいくと考えられる。

「2035 年までのロシアのエネルギー戦略案」では、ロシアのすべてのエネルギー資源輸出の総量に占めるアジア・太平洋地域諸国の割合を 50%以上 (2035 年) に引き上げることが目標として示されている。(注釈 3) ここから、ロシアが東方市場を重視していることが見て取れる。だがすでに指摘したように、中国への過度な依存は避けたいというロシアの思惑もある。そうすると、日本と韓国、さらにはインド、ベトナム等への輸出の強化がロシアにとって東方シフト政策遂行の鍵となる。その点で、エネルギー資源の安定確保と調達先の多様化を図りたい日本と利益は一致する。確かに日本では、政治的あるいは感情的な理由から、ロシアからエネルギー資源を輸入することを不安視・危険視する主張があることは否定できない。だが、経済的に見ると、日本とロシアのエネルギー貿易の拡充は合理的と言える。

2022 年 2 月 4 日記

注釈 1：BP Statistical Review of World Energy 2019, p.40.

注釈 2：同上

注釈 3：Проект Энергостратегии Российской Федерации на Период до 2035 года, 2019., с. 58.

課題番号	指 標	指標の数値 (年)		
		2018 (実績値)	2024	2035
217 b	ロシアのエネルギー資源輸出総量に占めるアジア・太平洋地域諸国の割合 (%以上)	27	40	50